国際日本研究センター

International Center for Japanese Studies

NEWS LETTER 東京外国語大学 Oct. 2026 No. 39

国際日本研究センター第 39 号　目次

◆ 国際日本研究センター主催　ワークショップ「能楽の囃子・実演と体験」 …… P.1

◆ 2026 年度夏季セミナー・サマースクール「〈世界文学〉との対話と批評」 ……P.2

国際日本研究センター主催
ワークショップ「能楽の囃子・実演と体験」
2026 年 7 月 3 日（金）17 時 40 分
東京外国語大学府中キャンパス大学会館和室



2026 年 7 月 3 日（金）17 時 40 分から、東京外国語大学府中キャンパス大学会館和室において、表記のワークショップが開催された。出演者は、笛：槻宅　聡（森田流）、小鼓：田邊恭資（大倉流）、大鼓；柿原孝則（高安流）、太鼓：澤田晃良（観世流）の４氏であった。参加者は、学内の院生・学部生、教員を中心に 20 名。

この企画は、一般社団法人･東京能楽囃子科協議会による、能楽の理解と体験を広める目的で開催されたワークショップを、授業（担当･友常）の一環として、公開したものである。映像は協議会の了解を得て記録化されており、今後の授業の教材としての活用を予定している。なお東京外国語大学国際日本研究センターは後援団体として広報に協力した。

能楽は 13 世紀から現代まで途絶えることなく伝えられている日本の古典演劇である。舞とともに、それに加わる器楽は囃子（はやし）と呼ばれ、能楽を音楽で支えている。冒頭に槻宅氏の紹介で楽器の名称と機能が説明され、それぞれの演奏者による実演と演奏が行われた。

ワークショップでは、４つのグループに分かれて、用意していただいたそれぞれの楽器を手に取り、囃子方のみなさんの懇切な説明を聞きながら音出しを経験。笛が一番難しかったようだが、鼓や太鼓などそれぞれの特色について体感することができた。単なる鑑賞にとどまらないエキサイティングな場であった。なお槻宅氏は本学スペイン語科の OB ということもあって、学生や教員を対象に外語大宝生会を主宰してきた（いまは休止中）。

東京能楽囃子科協議会は、能楽の囃子の演奏を聴き、笛・小鼓・大鼓・太鼓、四つの楽器に触って音を出してみるという体験型のワークショップをさまざまな場で開いている。これからも広報と普及に協力したいと考えている。

（友常 勉）

The workshop described above was held on Friday, July 3, 2026, beginning at 5:40 p.m. in the Japanese-style room of University Hall at the Fuchu Campus of Tokyo University of Foreign Studies (TUFS).

The performers were Satoshi Tsukitaku (Morita School) on the flute, Kyosuke Tanabe (Okura School) on the small drum (kotsuzumi), Takanori Kakihara (Takayasu School) on the large drum (ōtsuzumi), and Akiyoshi Sawada (Kanze School) on the taiko drum. The workshop attracted 20 participants, mainly graduate and undergraduate students and faculty members from TUFS.

The event was an open workshop originally organized by the Tokyo Noh Hayashi Association, a general incorporated association, to promote a deeper understanding of Noh through hands-on experience. It was held as part of a course taught by Professor Tomotsune. With the association's permission, the workshop was recorded, and the footage is scheduled to be used as teaching material in future classes. The Center for International Japanese Studies at TUFS supported the event by assisting with publicity.

Noh is a traditional form of Japanese theater that has been performed continuously since the 13th century. The instrumental music that accompanies its dance and drama is known as hayashi and plays an essential role in Noh performance.

At the beginning of the workshop, Mr. Tsukitaku introduced the four instruments, explaining their names and functions. Each musician then gave a demonstration and performed on their respective instrument. Participants subsequently divided into four groups, each taking turns playing the instruments provided while listening to detailed explanations from the hayashi musicians.

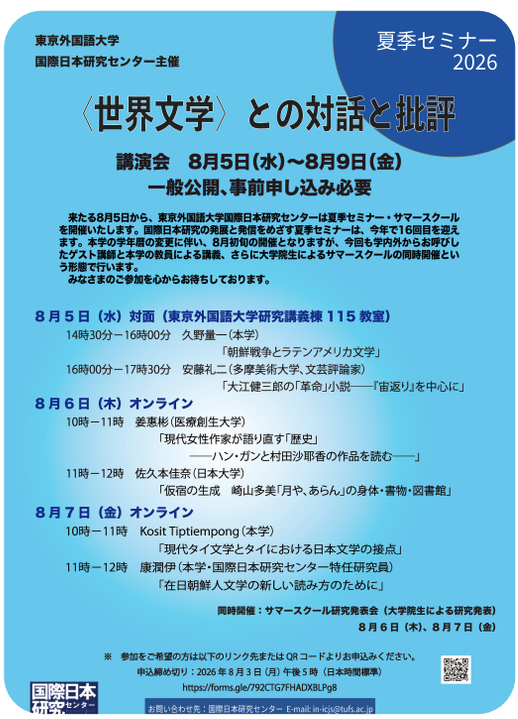
Although the flute proved particularly challenging to play, all participants had the opportunity to experience firsthand the distinctive characteristics and sounds of each instrument, including the kotsuzumi and taiko. The workshop offered an engaging, hands-on experience that went well beyond simply listening to or watching a performance.

Mr. Tsukitaku is an alumnus of the TUFS Department of Spanish. He previously served as the leader of the TUFS Hōshō-kai, a Noh appreciation group for students and faculty members, which is currently inactive.

The Tokyo Noh Hayashi Association organizes hands-on workshops at various venues, giving participants the opportunity to enjoy live Noh music and try playing all four instruments—the flute, kotsuzumi, ōtsuzumi, and taiko. We look forward to continuing our collaboration with the association to promote greater understanding and appreciation of Noh.

(TOMOTSUNE Tsutomu)

2026 年度夏季セミナー・サマースクール
「〈世界文学〉との対話と批評」
【夏季セミナー】
8 月 5 日
（14:30 ～ 17:30、対面）
8 月 6 日・7 日
（10:00 ～ 12:00、オンライン Zoom）
【サマースクール】
8 月 6 日・7 日
（13:00 ～ 15:10、オンライン Zoom）



夏季セミナー 2026「〈世界文学〉との対話と批評」が 8 月 5 日（水）～ 7 日（金）の 3 日間にわたって開催された。夏季セミナーは国際日本研究の発展と発信をめざして 2012 年以来開催しており、通常国内外のゲスト講師と本学教員による講演会と、国内外の大学院生による研究発表会（サマースクール）の同時開催という形態で行っている。

講演会は 5 日（水）のみ対面形式で、本学 115 教室において午後に開催し、6 日（木）・7 日（金）の 2 日間は午前中オンラインで行われた。全体のプログラムは以下のとおりである。

【8 月 5 日（水）】

＊久野量一（東京外国語大学）
「朝鮮戦争とラテンアメリカ文学」
＊安藤礼二（多摩美術大学）
「大江健三郎の「革命」小説――『宙返り』を中心に」

【8 月 6 日（木）】

＊姜惠彬（医療創生大学）

「現代女性作家が語り直す「歴史」

――ハン・ガンと村田沙耶香の作品を読む――」

＊佐久本佳奈（日本大学）

「仮宿の生成　崎山多美「月や、あらん」の身体・書物・図書館」

【8 月 7 日（金）】

＊ Kosit Tiptiempong（東京外国語大学）

「現代タイ文学とタイにおける日本文学の接点」

＊康潤伊（東京外国語大学）

「在日朝鮮人文学の新しい読み方のために」

今回の「夏季セミナー」では、ラテンアメリカ文学、日本文学、韓国文学、沖縄文学、タイ文学、在日朝鮮人文学を対象に、戦争の記憶や植民地主義、革命思想、ジェンダー規範、文化交流、マイノリティの表象など、多様なテーマから文学の可能性が論じられた。

久野量一教授は、パブロ・ネルーダやガブリエル・ガルシア＝マルケスらの作品を取り上げ、スペイン語圏のラテンアメリカ文学における朝鮮戦争の表象を考察した。戦争の犠牲者や帰還兵、植民地支配の歴史、帝国主義、人種・民族間の関係など、多角的な視点から戦争を捉えるとともに、プエルトリコ兵と朝鮮人の関係に見られる植民地経験の共通性や、言語・文化の混交に注目した。また、戦時下における性の管理や、日本の占領期から続く歴史的関係にも目を向け、ラテンアメリカ社会の歴史や政治、植民地経験と朝鮮戦争の結びつきを明らかにした。さらに、長らく忘れられてきた戦争の記憶と、現代の作家による新たな表現のあり方も取り上げた。

安藤礼二教授は、大江健三郎の「革命」小説の展開をたどり、特に『宙返り』（1999 年）を中心に、その思想的源泉と文学的意義を考察した。初期作品から『遅れてきた青年』に至るまで、革命運動や暴力、若者の反抗、社会との葛藤が重要な主題となってきたことを確認したうえで、『宙返り』におけるドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』、ショーレムによるユダヤ神秘主義研究、サバタイ・ツェヴィの棄教思想の役割を検討した。教団の指導者が教義を放棄する「宙返り」は、既存の権威や信仰を転覆し、新たな革命の可能性を模索する契機として捉えられる。さらに、スピノザの哲学との対比を通じて、理性や言葉を超えた想像力と預言者的思考の意義を論じ、大江が自伝的な「私」を超えた小説表現を追求しながら、革命と宗教、暴力と救済を問い直していることを示した。

姜惠彬講師は、フェミニズムとジェンダーの視点から、村田沙耶香とハン・ガンの文学を比較し、女性の身体、摂食、生殖、歴史の表象を考察した。村田の『地球星人』『消滅世界』『世界 99』では、結婚や出産、家族制度、生殖システムなどを通じて、社会制度が個人の身体や生き方を規定する構造が描かれる。既存の規範を解体しても新たな規範が生まれるという矛盾も、重要な論点となった。一方、ハン・ガンの『菜食主義者』『あなたの冷たい手』では、摂食や身体の変容を通じて、家父長制の暴力や女性の苦悩、自己の存在が問い直される。また、『少年が来る』『別れを告げない』においては、済州 4・3 事件などの歴史的暴力とトラウマが、女性の身体や記憶、世代を超えた連帯を通して描かれる。両作家の比較から、社会や国家が作り出す規範と暴力を批判的に捉え、人間のあり方や歴史的記憶を再考する文学の可能性が示された。

佐久本佳奈助教は、崎山多美の小説「月や、あらん」（2012 年）を取り上げ、作品に反復される「仮宿」のイメージを軸に、身体・言葉・空間の関係を考察した。本作は、朝鮮人「慰安婦」の記憶と声をめぐり、複雑な語りの構造と非現実的な物語世界を通して、他者の記憶をどのように受け止め、引き継ぐことができるのかを問いかける。講演では、意味のわからない言葉を身体に刻み込む行為や、本の背表紙を読み上げる場面に注目し、言葉が身体に宿り、新たな語りの空間を生み出す過程を分析した。さらに、女性たちが生き延びるために作り出す空間や、物語の結末に現れる突堤を「仮宿」として捉え、他者の記憶や喪失と共に生きる可能性を検討した。他者の記憶を特定の主体が所有・回収することなく、忘却に抗い、失われた声と出会うための文学的想像力の意義が論じられた。

コースィット・ティップティエンポン准教授は、翻訳・出版・読者文化の観点から、現代タイ文学と日本文学の交流の歴史と展開を考察した。タイ文学が伝統的な韻文から近代的な散文へと移行した過程を概観し、出版社 J-Book による日本文学の紹介や、江戸川乱歩、村上春樹らの作品の受容を通じて、両国の文学的接点を明らかにした。また、日本発の BL（ボーイズラブ）文化がタイ独自の創作やドラマ・小説の発展につながり、タイの BL 作品が日本でも受容されるようになった双方向的な交流に注目した。さらに、デジタルプラットフォームや SNS を介した読者・ファンの交流が、翻訳・出版・創作を結びつける新たな文化的基盤となっていることを指摘した。日タイの文学交流を、作品の翻訳や消費にとどまらず、相互の文化的影響から新たな作品や文化が生まれる「カルチャー・エコシステム」として捉える視点が提示された。

康潤伊研究員は、在日朝鮮人文学をめぐる「終焉論」を出発点に、従来の研究で用いられてきた「世代論」の限界を検討した。在日朝鮮人文学の特徴や正統性の根拠とされてきた「民族性」や「在日性」は、固定的なアイデンティティを前提とするため、作家や作品の多様性を十分に捉えられない。また、これらの概念には、血統主義や本質主義に加え、家父長制的な価値観やジェンダーの不均衡も内包されている。講演では、金城一紀の『GO』や金真須美の小説を取り上げ、作品が既存の文学的イメージや社会的規範とどのように交渉

しているかを考察した。これにより、「民族性」や「在日性」を唯一の判断基準とする見方を相対化し、在日朝鮮人文学を、マイノリティが生存し、その存在を社会に浮上させるために多様な形で応答してきた文学として捉え直すとともに、新たな共同性の可能性を探った。

以上の講演では、戦争や植民地主義の記憶、革命と宗教、ジェンダー規範、翻訳を通じた文化交流、マイノリティの表象など、多様なテーマが取り上げられた。それぞれの講演は、具体的な作品や作家の分析を通じて、文学が歴史的経験や社会的規範、暴力、記憶とどのように関わっているかを検討するものであった。各研究の視点を通じて、文学作品の表現や背景を多角的に捉え直すとともに、そこに描かれた歴史や社会の問題について考える機会となった。

同時に開催されたサマースクールは 6 日（木）・7 日（金）両日の午後、オンライン形式で行われ、東京外国語大学、早稲田大学、立教大学、シドニー大学、韓国外国語大学の大学院生 8 名による報告がなされた。それぞれ教員のコメントが付され、有意義な討議となった。

（川村 大）

At this year's Summer Seminar, participants explored the possibilities of literature through a wide range of themes, including memories of war, colonialism, revolutionary thought, gender norms, cultural exchange, and the representation of minorities. The seminar featured discussions of Latin American, Japanese, Korean, Okinawan, Thai, and Zainichi Korean literature.

Professor Ryoichi KUNO examined representations of the Korean War in Spanish-language Latin American literature, focusing on works by Pablo Neruda, Gabriel García Márquez, and other writers. He approached the war from multiple perspectives, considering its victims and returning soldiers, the history of colonial rule, imperialism, and relations among different racial and ethnic groups. He also highlighted shared experiences of colonialism reflected in the relationship between Puerto Rican soldiers and Koreans, as well as the intermingling of languages and cultures. In addition, he explored the regulation of sexuality during wartime and historical connections dating back to the period of Japanese occupation. Through these perspectives, he illuminated the links between the Korean War and the histories, politics, and colonial experiences of Latin American societies. He also addressed long-overlooked memories of the war and new forms of literary expression emerging in the works of contemporary writers.

Professor Reiji ANDO traced the development of Kenzaburo Oe's revolutionary novels, focusing in particular on The Flaming Green Tree: The Flip Side (1999), and examined their intellectual origins and literary significance. He first outlined how revolutionary movements, violence, youthful rebellion, and conflicts with society had remained central themes in Oe's work, from his early writings through The Silent Cry. He then explored the significance of Dostoevsky's The Brothers Karamazov, Gershom Scholem's studies of Jewish mysticism, and Sabbatai Zevi's ideas of apostasy in The Flaming Green Tree: The Flip Side. The "flip" enacted by the religious leader, who renounces his own doctrine, can be understood as an attempt to overturn established authority and faith and to explore the possibilities of a new revolution. Furthermore, through a comparison with Spinoza's philosophy, Ando discussed the significance of imagination and prophetic thought beyond the limits of reason and language. He demonstrated how Oe, while pursuing forms of novelistic expression that transcend the autobiographical self, reexamines the relationships between revolution and religion, as well as those between violence and salvation.

Lecturer Hyebin KANG compared the works of Sayaka Murata and Han Kang from feminist and gender perspectives, examining representations of the female body, eating, reproduction, and history. In Murata's Earthlings, Vanishing World, and World 99, social systems are depicted as structures that regulate individuals' bodies and ways of life through institutions such as marriage, childbirth, the family, and reproductive systems. The inherent contradiction that dismantling existing norms can itself give rise to new ones was also a key point of discussion. In Han Kang's The Vegetarian and Your Cold Hands, meanwhile, eating and bodily transformation serve as ways of questioning patriarchal violence, women's suffering, and the very existence of the self. In Human Acts and We Do Not Part, historical violence and trauma, including those associated with the Jeju April 3 Incident, are portrayed through women's bodies and memories, as well as through forms of solidarity that transcend generations. By comparing the two writers, Kang demonstrated how literature can critically examine the norms and violence produced by society and the state while reconsidering human existence and historical memory.

Assistant Professor Kana SAKUMOTO focused on Tami Sakiyama's 2012 novel Tsuki ya, aran, examining the relationship between the body, language, and space through the recurring image of a "temporary lodging place" (kariyado) in the work. Centering on the memories and voices of Korean women who were subjected to sexual slavery by the Japanese military, the novel employs a complex narrative structure and an unreal fictional world to explore how the memories of others can be received and passed on. In her presentation, Sakumoto analyzed scenes in which incomprehensible words are inscribed on the body and passages in which the spines of books are read aloud, focusing on how language comes to inhabit

the body and create new spaces for storytelling. She also explored spaces created by women as places of survival, as well as the breakwater that appears at the end of the novel. Interpreting both as forms of kariyado (temporary lodging places), she considered the possibility of living alongside the memories and losses of others. Her presentation highlighted the importance of literary imagination as a means of resisting oblivion and encountering lost voices without allowing any particular subject to claim ownership of or appropriate the memories of others.

Associate Professor Kosit Thipthiengphon examined the history and development of literary exchange between contemporary Thai and Japanese literature from the perspectives of translation, publishing, and reader culture. He provided an overview of the transition of Thai literature from traditional verse to modern prose and explored literary connections between the two countries through the introduction of Japanese literature by the publisher J-Book and the reception of works by authors such as Edogawa Ranpo and Haruki Murakami. He also focused on the reciprocal exchange through which Boys' Love (BL) culture, originating in Japan, inspired original creative works and the development of dramas and novels in Thailand, while Thai BL works subsequently gained popularity in Japan. Furthermore, he pointed out that interactions among readers and fans through digital platforms and social media have created a new cultural foundation connecting translation, publishing, and creative production. His presentation offered a perspective on literary exchange between Japan and Thailand not merely as the translation and consumption of literary works, but as a “cultural ecosystem” in which new works and cultural forms emerge through mutual cultural influences.

Researcher Yuni KANG began by discussing the “end” of Zainichi Korean literature and examining the limitations of the generational framework traditionally employed in its study. Concepts such as “ethnicity” and “Zainichi identity,” long regarded as defining characteristics and sources of legitimacy for Zainichi Korean literature, presuppose fixed identities and therefore fail to fully capture the diversity of writers and their works. These concepts also embody not only lineage-based thinking and essentialism, but also patriarchal values and gender inequalities. In her presentation, Kang examined Kazuki Kaneshiro’s GO and novels by Masumi Kim, considering how these works negotiate established literary images and social norms. Through this analysis, she challenged approaches that treat “ethnicity” and “Zainichi identity” as the sole criteria for evaluating Zainichi Korean literature. She proposed reconsidering this body of literature as a field in which minorities have responded in diverse ways to survive and make their existence visible within society, while also exploring the possibilities of new forms of solidarity and community.

Across these presentations, participants engaged with a diverse range of themes, including memories of war and colonialism, revolution and religion, gender norms, cultural exchange through translation, and the representation of minorities. Through close analyses of specific literary works and authors, each presentation explored how literature engages with historical experiences, social norms, violence, and memory. The seminar offered an opportunity to reconsider literary expression and the contexts in which works are produced and read from multiple perspectives, while reflecting on the historical and social issues they address.

The accompanying Summer School was held online during the afternoons of Thursday the 6th and Friday the 7th. Eight graduate students from Tokyo University of Foreign Studies, Waseda University, Rikkyo University, the University of Sydney, and Hankuk University of Foreign Studies delivered presentations. Each presentation was followed by comments from faculty members, giving rise to meaningful and fruitful discussions.

(KAWAMURA Futoshi)



発行：東京外国語大学国際日本研究センター
〒 183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 アゴラグローバル 2F
Email info-icjs@tufs.ac.jp
ウェブサイト URL jttp://www.tufs.ac.jp/icjs/